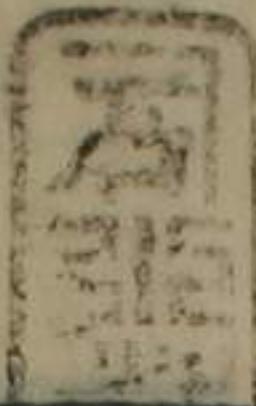


特  
18  
1833  
卷  
10



繪本左圖記第十之卷

目錄

坂井久義斬建部源八郎

博長八郎技坂井久義

明智光秀責其作落城

箕作落城

繪本左閻記卷之十

而  
幅  
廣  
而

坂井久慈斬達郎源八節

和論語云後醍醐天皇御年に歲の財内裏よりして後家の  
長三五計の小男づぐともなく走りてにがの宮に向ひく  
家臣居て諸卿乞を乞ふ皆眞とて何者ともいひ出と  
へき人もうきて宣ふことを強く白眼絆みよとて彼  
男らうじて明日も雨宿す心深ひ鷺雁  
風は厭ひ野干の雨を愁ふとあしへぬ心絆なすんとゆゑ  
こうべ此小男こうくと鳴て號すちうて失うる皆人  
を見まゝせ雄より百歳ちしども今年の魯に名すれ  
伽多の卵の内とて啼む諸の名勝とすとあり此君の

六角承頃觀音寺城退去

義吉郎政森山城

柴田勝家責日根城

信長上洛再貞の足利家

岩成主税助勇戦



三



坂井久藏  
建部源八

郎を折る

生長やがたをぞうりてことと感かんドおひうるとくらん寔ねよは雲樹くも芽め  
出でざる己おのれよ其そ根ね八十餘里よ蟠まぶり 桑檣くわ二乘にじゆにて番ばん  
もや坂さか井い右近うこんが嫡おとこ子こ也よ此こ时とき十三歲さん太腰だい不敵ふてきの荒あら  
童わらわ子こ之のるが兵ひ一騎いちき源げん馬ばを棄き出だし 扇おひを揚あて 塵ほ兵ひを  
拓ひらき候ま度どもを吐のき罵ののアタリべ鐵てつ兵ひ始はじめ 小冠こくわん者しゃ論る  
るに足あしららと返か善ぜんもかく 捨すて亟ただ余よの惡あく口くち捨すてかく  
乞う奉まつ達たつ那な涼すず節せつ血けきき聲こゑの義武ぎぶ者しゃなれど門もんを開ひらきと一ひと  
馳は走はし美うつくの小兜こぶつ櫛くしりよ惡言あくごんを吐のきすれし場ば中なか一ひと奴やつと  
仰あく石假いはんと大おき身みひろげて走はきおを久ひさ義ぎ氣きをもの如ごく  
馬ばを躍とらせ槍槍を擧ありて宴うたひと見み源げん八やもち刀とを拔ぬき一ひと束つか一ひと束つか  
秘ひ術じゆを展ひらひりひ久ひさ義ぎ槍槍の辯べん先さき三さん尺しゃく斗とう切き落おちさる源げん

又またびと組くみ付つく源げん八や完まつ亦よくお多おおい天あま勝かつ海かいの果かく報ほう者しゃう  
いで場ば中なか一ひと石いは假まつんと持もて引抱ひきへまぐくと立たけたる久ひさ義ぎが  
即そくる二人ふたりを討うすすと援あつてくく切きてくくる源げん八や序じもとづくに  
一人ひとを討うすすとく切き付つる此こ時とき久ひさ義ぎて差さ替かやもと  
久ひさ短たん刀とを援あ出だし源げん八やが禮れいの遙とおを力ぢく往むでく宴うたひ通つ一ひと絆くわん  
ハ何なううもたううべき馬ばようトうどふふど落おちる久ひさ義ぎ得えううが  
にと押おへく首くびを落おちく完まつ亦よと義ぎよて立たくたくたく日ひを  
ききからむと教お勅しきあうう

博長はくちやう、節せつ於お坂さか井い久ひさ義ぎ功こう

此この時とき場ば中なか四よ兵ひ十じ人じん源げん八やと之そ義ぎが戰たたかひひ見み物ものしてやう  
ううが後あと源げん八や討うすすば安やすくくじらひひを每まい雄おの丘おか又また十じ騎き

博長八郎  
坂井久藏  
を抜く



計城戸を開きて久慈主役を討焉と接はまく馳いづれ  
久慈主役りるの城ひよ力勞してしが不詮多勢をもうけ  
今城叶ぐと討死せんと向ふて信長卿の馬添よ導長節  
とくる大尉の者あう先とう本兵よ立く久慈が働きと感じ  
居しが城中よえ勢の討ひ出る爲々さき刀接うじきう  
て出久慈よ力と源進んで敵を待て城兵ハ源八分首をえ  
さんとぞと嘆て切てされ長ハ余狂もよく先よ進ひ民者三  
騒忽よ切例く右に齒モたよ支えも勢を娶しと勇と震  
ふく城よう後も長ハ節が敵ひよ力を得衰と先途  
と切られば城兵ども纏三人よ切立と進もみてよと不<sup>レ</sup>よ  
遙よ光秀が大軍圍を絞つて攻むると見えられば城ね古田出雲

守軍役を馳て城ひを制し士卒と城中へ引ひ入り導城兵  
も殺て城ひをほど敵の弓矢を幸よ撃麻を差てりうる軍勢  
の攻うちると刀斧一の導城兵を敵ひともうじ光秀う斎兵<sup>アシ</sup>を  
城兵を呼びき出さん斗争之城兵久慈に建部源八う首を乞  
大ねの実修よ傳へれど信長卿久慈が小猿よ不<sup>レ</sup>無のる  
をと頼ひ殺ひつやく御寝酒もよううされば久慈を乞  
げに退き久慈年稚くとゞも勇猛衆々誠敵の勇ぬ  
建部を計りう候某其傷よみ合せ始終不<sup>レ</sup>刀を也  
我らよ君其功を頼ひ殺ひ寝坐の御酒酒は久慈重ての  
城ひよ討死とぞ是下此ゆをて宣教給馬一をもろに

軍中別勝れれば洋々らざる所い丘士志く勇を励まし  
又く言ひて久義が功を欣へり絶てと詔うきば縦に  
其發意を異は信長御よやと懸嘗を以て福徳が  
久しが信長御故め久義博長八節謹で久義が勧き委細は言ふて及びぬ  
を勧め多べ長八節謹で久義が勧き委細は言ふて及びぬ  
生ば久義も長八節が歎ひよよく歎孔透きぬと曉被  
よや上づれど信長御括て久義が功を絲一絶ひ感狀  
を賜ひ又は又百貫を下し終は長八節が勧き乞又称をせ  
もとがさよおき名を博固ちの心尚と賜りられが世人津  
恩を謝りて却て御茶を退きる

明智光秀政筆

去りてよ明智光秀と弟を宣わせ井右近森三左衛門と知  
く重て城下攻討す。も城中暫く矢石交戦。一方、敵ひ  
ころびあらずや。ようやく敵の丘へ急角進み。刀々を失  
ひ。海王煙んじ。今度も城戸を開て討て出さん。よかげ立  
追まく。バ坂井處のあし人將。一矢て歎ひ。一矢をとる。に  
乃踏みぬく敗走と此時後を既に和田と城攻め。信長の  
の令を受其代は西宮守雲固みて等閑の城にて。伏落  
延引せば妨げあらんとして光秀をアシタの勢又百余  
人をそろ具く明智が陳。まう光秀よ其の斗略を向く。光秀  
を殺すが和田と之を攻めや。を以て甚心を若くや言て云く  
某斗略大を以れ。既に落城のきじ限どつて今味方の



諸の歓兵をせびき出で武より殺さし某が謀しては  
と本下よく其の後を勝り主將の斗賤城と落城され  
ん落城下を勢ひたゞく斗賤十から又乃ひがこうと某が勢  
を含せ此度の大勢にて向ひ能はずを約ひ終て光秀  
其の内に之の底を勢を我勢と合せ却合ふ余人又く  
城へ來る者も城兵坂井處が兵を切立く勝よ棄て退ひ  
走り光秀が勢入習つて武い後炮をうち放ち歓兵とお  
まろじりとせんと達りうるが事のあく城兵もと長押し  
して遇まとと種をぬいてるゑうち此の光秀士卒とト也  
急よ城際へ押寄るを約さんとて城兵付へて止と  
忍びよ爲て改ざんば光秀も殺て武いを奴まじて城乃

口方を立圍み後炮と放ち失と村け城中の兵と村居す  
箕作落城

此付城中固く守り矢石不振し一時武と光秀が我半略  
勝と成りぬ此城今や落城せんと息を詰てかく付本下  
兵の内より一人馬を極限へ素むじ難を揚て城兵を止  
まし大畜そてやうり出城既と此方のみとゆすうれると  
まく腰と行を教え防戦もとやよく落城しては命令と  
全くせよと豫もと小及んでの城壁ともと粉のあくと腰と  
とあらうにひづく口畜よどくと矣と落兵へ云ひ及ばず味  
方の勢もたれ強き其友を嘗てかくに光秀も腰と  
さうと後方我深を推察してかくにまく罵らし城兵と

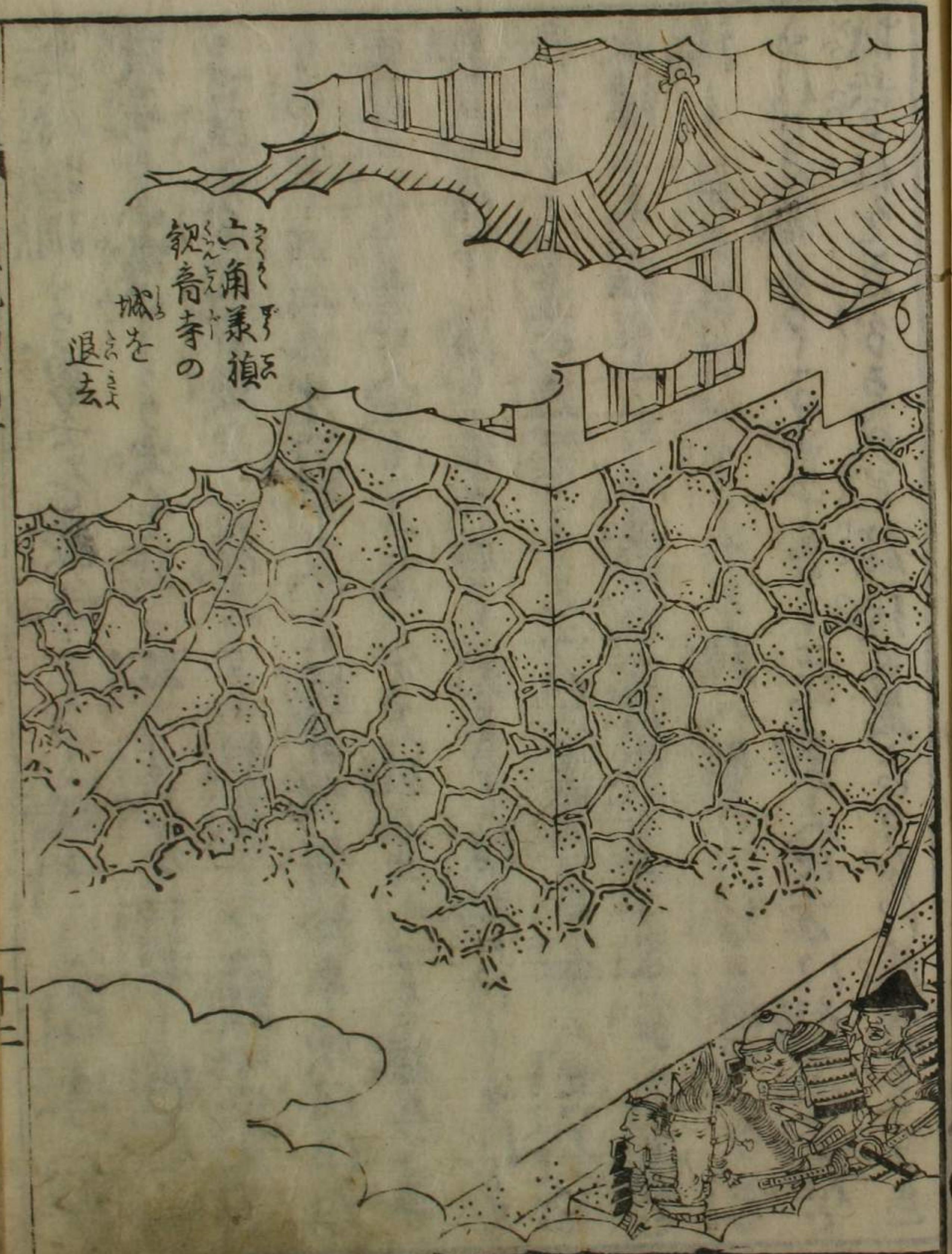
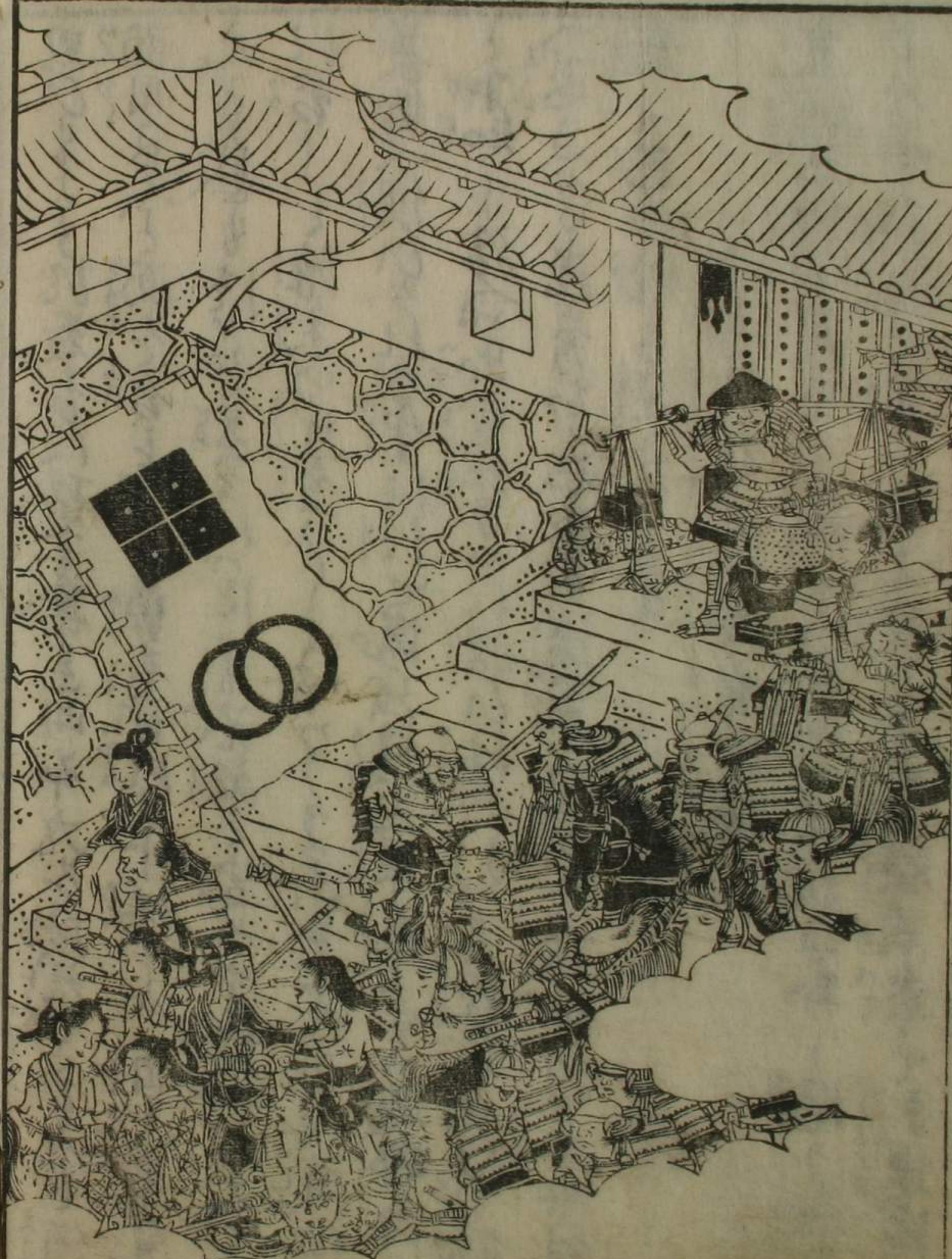


毅しも斗氣をもんとわ縁て城中と見るふ中治隼人と  
つる功の者擣より士卒と下り居る者一人の大漢子は  
もう駆き出中石兵一刀よ切殺を安よかしく城中ゑに周章  
發き遂反人とはつるゑに忽みきの吹貫を城中よゑく  
指工本下爰吉郎筆へはの城一番系と名くよひて小六  
を始ら稲田尾加次田がま三十餘人に方よ教て切とれり  
城中よゑよと強き札と何きを歎何きと味方と見え定め  
さく右往左往又途よりうそを見く處坂明智智と呼んで  
玉や進むと不祥ことあり一ま余人退きの門を押破り一門  
乱と入勘る者を切ゆる城兵今ハ防ぐがたれよ三十九九へ  
近籠主主ぬ出雲守忍紀みゆき戦より明智光秀乃至も

思ひよよげんあん功を集き此奉丸を攻落せどんを何  
面目よ人と面を合ひざきと勇氣自以よ十倍して自失せよ進  
んぐ身もしがど事さればにも忍紀と定らる城兵も大  
い若くも隊伍の變ぐよ嘸うたるふぞ光秀此有信  
長卿へ便ひられば重に任せ城兵清正軍兵ども返拂ひ  
とやかく終び出雲守忍紀は江戸に親書寄れや城  
へ退きうる光秀かなよ々諸軍の勞ヨア体めうる此時  
既よ已の慰もよとす

六角義貞退去親書寄城

箕作の源政光秀が謀りの隊兵を呼び出し御立廻て  
おれ男よ付大軍一度よ攻とう討り敵周章てお退臣



其扇物訓へる勇士を歎兵よまと城中へ入る後てあは  
攻ちる小城中より火を放つて武の主ねを切殺し  
とせ攻入がて方役たり徒とども新条との服心の良事  
もざく此時城中へ移りて後半明智経平次内治即  
奥田三宅等に人の多くあるも凡段きるを恐みて卒  
忽よ多兵下し得ど爰若即も光秀と諒暗の月ノヲレ  
兵士り小六黨の強盜アそ志のひの達人三十餘人其上を  
承祐三年織田今川桶狭間の合戦の付佐い本家より備足  
清ノ具足威眞神亞マセを狩へ歎兵よほど城中又入る  
アシバアソガラマサウ曾てなく三十余人に方に散て切血し  
隊兵それを見たるア不破綱よ爰若がゑに脅威と云々

本トダガ篠原義定の才智ニ信長卿ハ本トダガ斗勝アモ和  
田山箕の御あ城を一日の内より攻めし其勢ひ破竹の如く  
也ヨ親育寺の平城を夷らじとほ定運くわるモタラグ  
本トダ反右郎が斗ひて親育寺の城へ侵節を立業復又  
又ヨ海系と進む松も佐々木業復入るハ和田山箕の御兵一  
時又落城へられべから難るゝ恐怖周章大方なうびへぐ  
もせんとほ城の主中小田家より侵者も来せずかぬ入  
て其口よりを立ヨ海系せば不貲安堵アベキ案理を匿  
てヤ速ろ業復率ひ立業ども不破路より返答に及良  
とぞ侵者を返し立室立アテ恩案もなく周章狼狽調  
度財富をそくくよ立持セ妻子一族を連て城中に石部の

城へ落紹へる若くをもろみ様たり

本下爰吉郎政森山城

義復又親善寺の城退去の由きとべ信長連軍と  
入城し勢いよく勢ひよ素く佐々木の附城を悉く攻  
落としそれ日向の城へ出で因勝家佐々木内藤久蔵谷兵庫  
院三人其勢一万余騎衆との城へ本下爰吉郎池田忠三郎  
あん又余九月十二日已の刻因附と親善寺を進發く  
左近にまよて馳うちう焉山の城より種村大兵衛大輔と  
おもて上坂主馬助一と余人とも寃せど矢石射付とも  
けり義吉郎孫ゆきを定め歎くに方を立國を東京都  
を守り近尾貢助吉膳を立て役者とひく塔中(城)に居しむ

城兵欲あが食限り防戦とじて拳を按て結うる小戦いも  
始らじく役者を人用帽を常せび平衣うそ入走う種  
村又對面して今度小田信長義昭ふを守立大軍上洛と  
る所に尤く本義復御味方よゑうざるを以て和田山箕の地  
の要害附よ踏渡し義復又甚恐怖一向ひうふ謀を  
捨落失うる恐るみ今此小謀又縁のく教籠城にて小田の  
大軍と戰ひ結構あるひ兵抱く圍よ入勒を負て燒討  
を以てはトうじ速よ落条ひてかしてひ全く敗令の海  
流よ及び若狭系ほ退よ及ぶ時に忽城壁移のびく  
城血とあともと間本下爰吉を痛く某よ命令して後節  
すく一意を加へて返答ひとく種村上坂役者



十五



十四

の口と傳若安人なるが懇ろとつとも事に附て遂斗を勝ん  
と密々收ひ明日城兵をもつて河陳へあり隊衆仕合し  
候者凡て軍兵死ひて今宵本下が陳を夜襲す良  
と用兵をか一目の事あるが猶居る

### 池田信輝詩種村大義

松も塙ぬ種村大義隊余のよりばられ本下が軍勢一千  
ぞうう陳營を退け兵士等甲冑を解く酒宴を以て圍心  
のきを更よなく十矢傍て刃を以て其夜のまむだう  
種村と抜き三百余騎本下が陳へ押す儀よ闇を以て弛今  
うちふ陳中丈よ人影は種村大義よ驚き歎の遂斗よ落  
たるぞ遂よ退けとよ後こそりと忽耳えよ後炮寄本下

後吉池田信輝三万余人闇を以て切てくれば種村が勢狼狽  
強き我見れよと遂生と云陳のたおう本下が伏勢一千余  
一日よ起く鐵兵を中よな籠こんくよ蘿立よばすよ若の  
殺をそよび太ね種村大義の幽囚互双の勇士なれどよし  
強き群ろ歎を切接道を用こ落りて本下が池田信輝  
槍擧げきたは返せと追ひけりう大義馬の口を引よしを刀  
差向よじかくよよまゆる武勇の壯士右に拂いたよ文  
精作を勵ほし鐵いのうが信輝槍殺とて大をひろげて組  
合うう池田が即等片付まをうき刀抜きよ種村が馬  
の前足を切放と種村何うともばくもたまうべき馬より  
ぐふと落信輝も口下くゆき重り重り後よ種村をみて推

池田信運  
種村大藏と折



首々さきて立られがまほと乱世三つうち  
登りが皆死奈をぞくうする此歎いの家内よ小山の城内  
六百余入城中へ私入敵るか幸切れが思ひよざく  
蟻丘へも防ぐぐゑもやうがこそ玄れ討はせ捕ま経はせ  
山の蟻丘活けてしまふ富の刻ハヨダラホ本下池田城守  
よ入て休息ノ假者を呼ぶ此有信長卿へ往進を

柴田勝家政日野城

けじもひろまど歎へ流石名れあよ涌きうよと歎  
味方も感づりうそれども小田の屋下酒一の勇士紫田  
權六節勝家令をえく向ひ軸中度の合戦を右攻  
勢を奪うれ顔面皮を失ひぬま此城を攻め即因内攻  
層をどんがせて一度面を人に合はし心よお云ひ難よ乃  
銃炮一時よわしき自生先よ馬をともめ再び退却せば  
曰ふを捨てよとほむき廻もやし希よ経者ハ猶と云  
き後は進むより禮の禮なりじ襷を傾げ天邊の完と  
す奴まえ進みて令と武揚の塵とあととくも退て卑思  
の客外歎よ嘆きうれや人ぐ我くも活まどといとミ  
よ爾で弛つてあさま天神の威を放り鬼神れ勇



を遣よて荒あらよあまく進すすむしの宴うたひよ小田おだの内うちで  
裏さか山さん田たと呼よむるも程ほどまだうと々と々よなう城じゆう中心ちゅうしんハ獨ひとり  
ふせげとも勝家かつやが強いわき勇いさり又またききえ大おほきもの政まこと口くち既すでみ  
なんとと城じゆうを右う左さ互ひ湯ゆを浦うら秀ひで賢けん櫓やぐらよより大おほき寄よせつて往むか  
荀こ小年この丘おか私わたくし相馬さがみ門もんを村むらて名譽めいよを露あらわしたる儀ぎ義ぎ  
左ひだり秀ひで系けい秀ひで卿けいが後ご胤いん教きょう代だい當とう城じゆうよまよろ浦うらを秀ひで賢けん櫓やぐら  
幼むすめの矢や文ふみく法ほうを経へやと人ひと張はりよ十じゅうに余よ歲とし月つきのび  
ひきひきかかがが切き放はなてて先さきよ進すすし禮れい武ぶ者ものの獨ひとり桺さくらを立たて  
村むら通とおし後ごよれう雜兵ざつぐを余あまる矢やにて村むら側わきに乞こを立たて  
並そなの始はじめに指さし詔のぞ小こ治じ村むらうれいうれい此この矢や先さきよ向むかひの命めい館たて  
活まわる者ものを人ひともななく憐あらわめよもよ十じゅう又また六ろく跨か幕まくを立たてして

御ご主ぬしににも勝かつ率りつする柴しば本もと勢ぜい將じょう一いつ行こう軍ぐんかかへと  
寔じつよゆゆひひく勝家かつや力ちから致いたそそい味み方ほう孔あな傷きずの者もの多多くんんも  
家いえ系けい義ぎ孫まごは即そく年ねん家いえを復おも者ものと爲な一いつ城じゆう中なかよ入いく利り  
害がれ死死說わざ義ぎ孫まごの味み方ほうを進すすみみば浦うらす文ふみ其その程ほどよ暇ひま  
終つゝよ城じゆうをひきひき隠隠系けい一日いち時じの城じゆう車くるまよく落おちる  
志しすううきき勝家かつや役わく者ものをみて信長のぶなが卿けいへ進すすて臂ひく  
城じゆう中なかに入いく体からいいる

信長のぶなが上あ治じ而と再な直ただ足利家あさかわ

信長のぶなが御ご院いんよ和わ田た山さん其その他ほかをそそれれ執つか事こと寺てら夷い山さん日ひ照てらの  
城じゆう々々を二に日のの内うちよ政せい落おち一いつ破竹はつちくの勢ぜいひひとと政せい也やる衝つ突つへ  
之の長光ながみつ寺てら莫津ばつ守もり佐山ささん堅かた田たの城じゆうくおひ城じゆうを用もちい



上信  
長治  
利行  
家足り  
再興





海軍一ノ又ハ敵又終シテ退城シ佐久本の枝城とべ  
十八ヶ石巻く支活ト同月廿二日寺山寺ム参リ活  
幕後の軍勢大津馬場松平山科院砂宇治の邊に立  
置シ威を遠近ニ震ひ三姫等並て宇治勢固  
兵士を徴戦ひを挑むるト宣らケルト其を配<sup>ミ</sup>  
調<sup>ミ</sup>うち内ニ信長佐<sup>ミ</sup>本と征伐<sup>ミ</sup>して上洛ありけ<sup>ミ</sup>ト三  
姫の安<sup>ミ</sup>て恐<sup>ミ</sup>何様信長<sup>ミ</sup>天魔鬼神<sup>ミ</sup>そヤラ<sup>ミ</sup>んと  
防戦の便<sup>ミ</sup>教<sup>ミ</sup>乱<sup>ミ</sup>落<sup>ミ</sup>者多<sup>ミ</sup>うなげ今<sup>ミ</sup>京都<sup>ミ</sup>  
て戦<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>立<sup>ミ</sup>求<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>五<sup>ミ</sup>物<sup>ミ</sup>も五<sup>ミ</sup>あ<sup>ミ</sup>ど津の圓<sup>ミ</sup>う<sup>ミ</sup>て<sup>ミ</sup>あ<sup>ミ</sup>う  
うされバ信長<sup>ミ</sup>上洛<sup>ミ</sup>の御<sup>ミ</sup>道<sup>ミ</sup>故<sup>ミ</sup>て<sup>ミ</sup>遼<sup>ミ</sup>者<sup>ミ</sup>を人<sup>ミ</sup>もかくせ  
八日急<sup>ミ</sup>かく入<sup>ミ</sup>洛<sup>ミ</sup>シ<sup>ミ</sup>公方義昭<sup>ミ</sup>の御<sup>ミ</sup>宿<sup>ミ</sup>は水寺<sup>ミ</sup>

に定<sup>ミ</sup>め信長<sup>ミ</sup>の東福寺<sup>ミ</sup>より隙<sup>ミ</sup>を居<sup>ミ</sup>らん<sup>ミ</sup>辦<sup>ミ</sup>を飛<sup>ミ</sup>狼<sup>ミ</sup>  
籍<sup>ミ</sup>を制<sup>ミ</sup>し<sup>ミ</sup>洛中<sup>ミ</sup>洛外<sup>ミ</sup>の町人百姓<sup>ミ</sup>を保<sup>ミ</sup>ド<sup>ミ</sup>終<sup>ミ</sup>ハ鬼神<sup>ミ</sup>の如<sup>ミ</sup>  
く恐<sup>ミ</sup>き要<sup>ミ</sup>う信長<sup>ミ</sup>卿<sup>ミ</sup>寛仁<sup>ミ</sup>の政<sup>ミ</sup>志<sup>ミ</sup>と委<sup>ミ</sup>ん<sup>ミ</sup>ド諸<sup>ミ</sup>方<sup>ミ</sup>  
太<sup>ミ</sup>小<sup>ミ</sup>名<sup>ミ</sup>郡<sup>ミ</sup>主<sup>ミ</sup>を始めヒ百姓<sup>ミ</sup>町人<sup>ミ</sup>よも<sup>ミ</sup>るととま<sup>ミ</sup>  
捧<sup>ミ</sup>げ物<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>お<sup>ミ</sup>系<sup>ミ</sup>東福寺<sup>ミ</sup>市<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>上<sup>ミ</sup>洛<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>か<sup>ミ</sup>て<sup>ミ</sup>き<sup>ミ</sup>  
其中<sup>ミ</sup>又連<sup>ミ</sup>教師<sup>ミ</sup>紹<sup>ミ</sup>巴<sup>ミ</sup>法<sup>ミ</sup>擧<sup>ミ</sup>末<sup>ミ</sup>度<sup>ミ</sup>の扇<sup>ミ</sup>と二<sup>ミ</sup>奉<sup>ミ</sup>獻<sup>ミ</sup>一<sup>ミ</sup>筆<sup>ミ</sup>  
信長<sup>ミ</sup>御<sup>ミ</sup>後<sup>ミ</sup>御<sup>ミ</sup>たり<sup>ミ</sup>し<sup>ミ</sup>

二<sup>ミ</sup>奉<sup>ミ</sup>ひよ入<sup>ミ</sup>れ今<sup>ミ</sup>日<sup>ミ</sup>乃<sup>ミ</sup>すろ<sup>ミ</sup>

と仰<sup>セ</sup>キテ<sup>ミ</sup>紹<sup>ミ</sup>巴<sup>ミ</sup>と<sup>ミ</sup>り<sup>ミ</sup>ゆ<sup>ミ</sup>

翁<sup>ミ</sup>を<sup>ミ</sup>よ<sup>ミ</sup>な代<sup>ミ</sup>も<sup>ミ</sup>代<sup>ミ</sup>のう<sup>ミ</sup>ぎ<sup>ミ</sup>そ

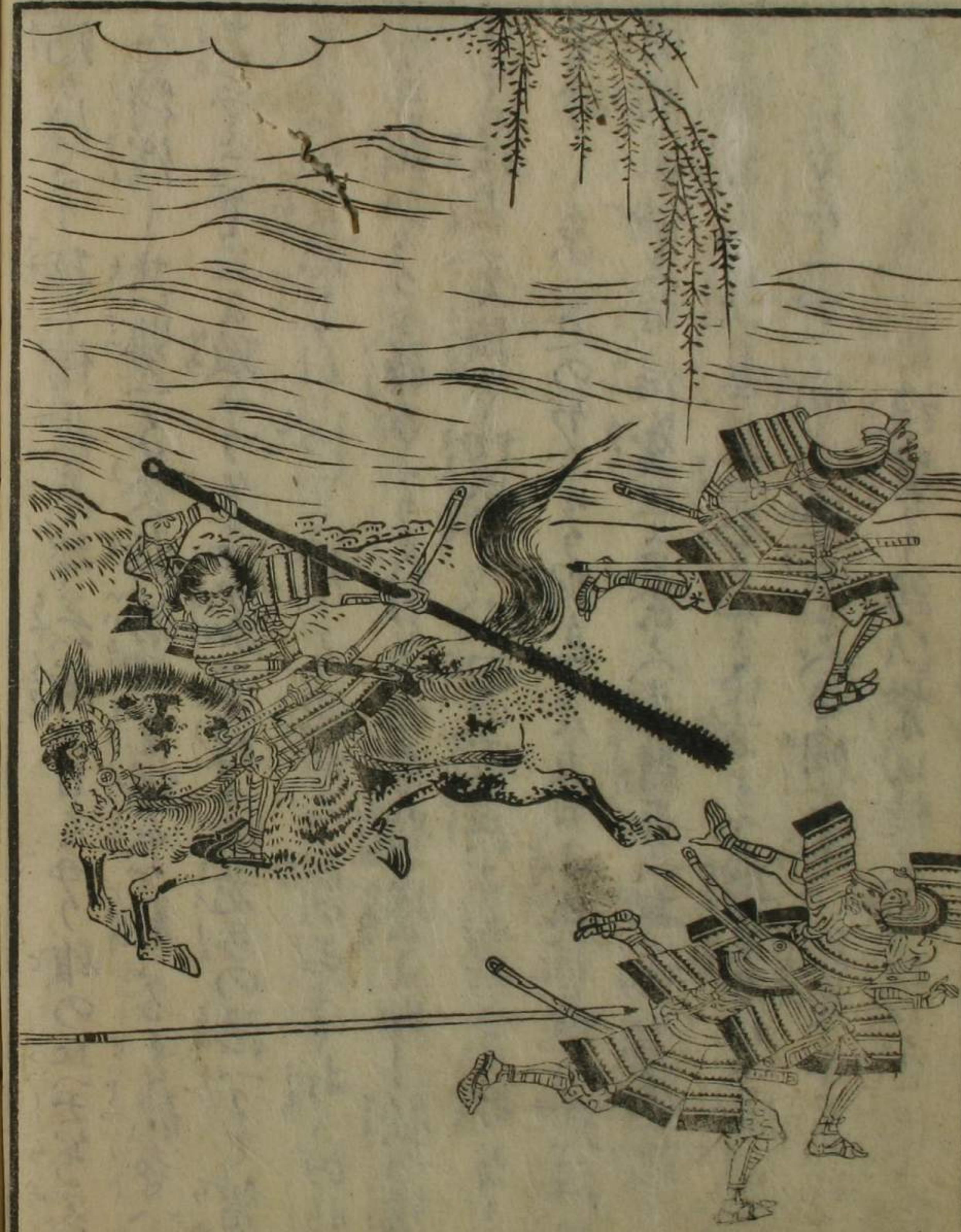
と<sup>ミ</sup>浪<sup>ミ</sup>く<sup>ミ</sup>奉<sup>ミ</sup>え<sup>ミ</sup>れ<sup>ミ</sup>信長<sup>ミ</sup>御<sup>ミ</sup>感<sup>ミ</sup>が<sup>ミ</sup>よ<sup>ミ</sup>び<sup>ミ</sup>福<sup>ミ</sup>教<sup>ミ</sup>多<sup>ミ</sup>

楊子けれど

紫田流久向攻青龍寺城

去程ヨニ三好家の一族郎等京都と退きまゝ龍寺の城ヨリ岩城  
を獲外祐道一又余彌子て捕籠る櫛又入に右近八百余  
騎家川ヨニ三好日向守長絆ニ又余彌清水とも條不左近  
進一又余彌布弓の櫛ヨリ京都の將軍義宗云を守護  
佐川梯部之助三好義次郎ニ又余彌其外池田又池田純  
後守條丹又守尼崎又荒木村津守籠城  
河内國鉢表ヨニ三好下野守政康ニ又余人同圍る野ヨニ三好  
山城守康長入道笑若ニ又余人、又も勇氣の武士皆有  
國よ教主と信長の大軍と防ぎまんとを配を定め

伏見にけり。又、信長が京都を攻め、その勢一も余強岩底主税久が籠るまゝ龍寺へ押さへて、二度三度攻めたり。岩底は三日之内に三老臣の所へとて智勇過人也。良ねならば、火も發うど、鉄炮を雨のごとくおうけ置き。防ぎ難ひ、うるが弱みより、百人の軍勢密に却急は攻め、若狭を切ひせば、小田の軍兵そんぐよおろこびちふく。京へ逃のけり。九月十九日、小田信長の先陣紫雲勝家佐久間信忠も、余人まゝ龍寺へ押す。其軍勢に附て進むべし。只一息の攻め、そんと上方より操立されしば、岩底主税久が死れた力尽くを用ひ退去しが、さく間に士卒の助命を乞ね、ひし、信長其旨許容して、多ひ柴本田佐久間政にを退き、隣と



とておへけり岩盛主経一と余彌助を用きて退出り故川の城と急ぎ下り又故川も渡過りとゆきもれと馳下りて本下アシタ即等小六又十郎稻田大炊堀尾義助ニと余人人以て埋伏マハラク左右より討て出淺アヒラと実アツミとが岩盛が勢又百余人討死アラヒテスルえんぐよ如く遂アリてうるが主税从猛勇マサキツムサク壯士アシタなれど一方を切抜アヒラハタケルよして故川の城下落アヒラハタケル行アヒラハタケル

繪幸吉圖記卷之十終

